『埼玉大学紀要（教養学部）』第 57 巻第 1 号、2021 年

知識論証再訪

The Knowledge Argument Revisited

星野　徹*

Toru HOSHINO

物理主義批判として有名な知識論証の妥当性について考察する。Ⅰでは、メアリーが獲得するのは命題値ではなく面識知であると主張する面識仮説について検討される。面識仮説は、妥当であるとしても、物理主義擁護という目的を達することはできないということが示される。Ⅱではクオリアについて想像する際には想像力が特殊な使われ方をしていること、白黒の部屋のメアリーが色彩の視覚体験に関する想像力を欠いているのはメアリーに課された物理的制約によるものであることが明らかにされ、知識論証に対する反論の可能性が提示される。最後に、知識論証と想定可能性論証の関係について考察される。

キーワード：面識による知、共感的想像力、知識論証と想定可能性論証

ジャクソンが考案した知識論証は、奇抜な状況設定から、誰にでも理解できるシンプルな議論によって、物理主義が成立しないという重大な帰結を導き出す、哲学者にとってお手本となるような思考実験である(Jackson, 1982, 1986)。1982 年に発表されて以来、現在に至るまで、議論を巻き起こし続けているのも当然のことである。私も、かつて、知識論証について論じたことがある（星野、2007）。そこでは、ジャクソンの議論に対する物理主義者の主要な反論は失敗しているということを示したのであるが、それでは、果たして知識論証が成功しているのかどうかという肝心要の問いには正面から答えることはしていなかった[1]。改めてこの問いについて考えてみたい。

Ⅰ　面識と能力

知識論証とは次のようなものである。

生まれるとすぐにモノクロームの部屋に幽閉され、一度も有彩色を見ることがないままに成長した天才的頭脳の持ち主メアリーが、色彩科学の英才教育を受けたとしよう。彼女は白黒のテレビ画面と白黒の本によって、色を持つ物質表面や光の物理特性から、眼や視神経、さらには脳の視覚野の構造に至るまで、色彩に関するあらゆる物理的情報を教え込まれ、理解するのである。色についての全物理情報を獲得したメアリーが、生まれて初めて白黒の部屋から解放され、熟したトマトや

* ほしの・とおる、埼玉大学人文社会科学研究科教授、哲学

1 そこでは、能力仮説と呼ばれる説と、現象的概念という特殊な概念に訴える説が批判的に検討されている。

晴れ渡った空を見たとき、彼女は新たな情報を獲得するだろうか。

ジャクソンによれば、初めて外界に接したメアリーは、外界のあり方と外界の視覚体験のあり方について新たな知識を獲得するはずだと言う。メアリーは初めて色を見たときに、「赤が見えるとはこのようなことなのだ」あるいは「青はこのように見えるのだ」といった感慨を抱くことだろう。色を見ることによってメアリーが新たに獲得したこうした知識は、色彩の知覚体験についての物理的知識ではあり得ない。メアリーは色彩についての全物理情報を持っているからである。したがって、メアリーが新たに獲得したのは、色の視覚体験についての非物理的な、ということは、すなわち、心的な情報であるほかはない、というのがジャクソンの言い分である。視覚体験には聴覚体験や味覚体験、痛み体験などとは異なる独特の質感がある。ジャクソンが正しければ、視覚体験が持つ独特の質感、いわゆる視覚体験のクオリアは、物質表面や脳の視覚野の物理的性質とは異なる心的な性質なのである。世界は物理的性質だけからなっているわけではない。世界には心的な性質もあるのである。

知識論証に対しては数多くの反論が提出されているが、ここでそれらを改めて検討することはしない。ただ、次のような問いを考えてみたい。ジャクソンによれば、白黒の部屋にいるメアリーは、色と色覚体験についていかなる情報を与えられても、赤が見えるとはどのようなことか知ることはできないという。ここで、ジャクソンに反して、メアリーは赤の物理情報を与えられれば、赤のクオリアについての知識を獲得することができる、と想定してみよう。どのようにしてかは知るよしもないが、天才メアリーは、赤に関する物理情報をもとに、赤がどのように見えるか知ることができるのである。それでは、メアリーが赤のクオリアを知ったとすれば、そのときメアリーには何が起きたのだろうか。メアリーに赤いトマトが見えてきたのだろうか。

もちろんそのようなことはない。彼女はまだ白黒の部屋にいるのであり、赤いトマトを見ることは許されていないからである。メアリーには外界に存在する赤い何かが見えてきたのではなく、赤の像が生じてきたのである。赤についていろいろと学ぶうちに、メアリーの内には次第に赤の像が結ばれてくるのである。

メアリーが赤を見ることなしに、赤がどのように見えるのか知るためには、実際に赤を見たときに生じる視覚像に類似した像がメアリーに生じることが必要であるように思われる。「赤はこのように見えるのだ。熟したトマトを見ている人はこのような視覚体験をしていたのだ」と思うことができるためには、メアリー自身にこのような見え(look)が現れ、メアリー自身がこのような視覚体験をするのでなければならないからである。

ここで特殊な能力を持った人物を想定してみよう。この人物――スーパー・メアリーと呼ぶことにしよう――は意図的に自分の脳状態を変化させることができるのである。私たちは意図的に手を上げたり眼を開いたり閉じたりすることができるが、意図的に自分の脳状態を変えることはできない。手を上げようとすれば運動野に変化が生じるのかもしれないし、赤いトマトを見れば視覚野の状態が変化するのかもしれない。しかし、それは私たちが意図的に起こした変化ではない。私たちが意図することができるのは、手を上げることや、眼を開いて赤いトマトを見ることだけである。私たちは自分の手や自分のまぶたの身体像を持っている。身体像を持つからこそ、たとえば右手の

存在について知覚的に気づくことなしに、右手を上げようと意図することができるのである。右手を上げるために、右手を見たり,左手で右手に触れたりして、右手の存在と右手のある場所を確かめたりしなければならない、などということはないのである。ところが、私たちは自分の脳については右手の身体像に当たるようなものを持ち合わせていない。だから、自分の脳の運動野や視覚野を変化させようとすることが一体何をすることなのか、全く見当がつかないのである。

ところが、スーパー・メアリーは、普通の人間が決して持つことがない自らの脳像を持ち、その脳像を手がかりに自分の脳状態を意図的に変化させることができるのである。しかし、こうしたスーパー・メアリーの能力にも物理的な制約があるはずである。赤い色を想像することに対応する脳状態ならば意図的に生み出すことはできるものの、赤い色の視覚体験に対応する脳状態は、彼女にも生み出すことはできないだろう。赤い色の視覚体験に対応する脳状態は、実際に赤い物を見たときにだけ実現するのである。これは普通の人間の身体的行為に制約があることに対応するものである。たとえば、私たちは意図的に息を止めることはできるが、意図的に自分の心臓の鼓動を止めることはできない。心臓の鼓動を止めるにはナイフで左胸を突き刺さなければならないだろう。このように、私たちが自分の心臓の鼓動を意図的に止めることができないのは、それが論理的に不可能だからではなく、人間の構造がそれを不可能にしているからである。スーパー・メアリーが意図的に赤い色の物を見たときの脳状態を生み出すことができないのも同じことである。スーパー・メアリーの身体がそれを物理的に許さないのである。

メアリーと同じように、スーパー・メアリーも白黒の部屋で色彩の科学の英才教育を受けたとしよう。彼女は、赤い色を想像するときの脳状態についても細大漏らさず学ぶことだろう。人が赤い色を想像するときの脳状態について学んだスーパー・メアリーは、そうした脳状態を意図的に生み出す能力を獲得することだろう。彼女はいつでも赤い色を想像することができるようになったのである。ところで、赤の想像に伴う脳状態について知ったスーパー・メアリーは、赤い色を見るとはどのようなことか知ったと言えるだろうか。いわゆる赤のクオリアについての知識も獲得したと言えるだろうか。答えは否である。スーパー・メアリーは赤を想像するときの脳状態について知ることによって、赤を想像する能力を獲得したのではあるが、まだその能力を行使していないからである。自らの脳状態を意図的に変化させ、赤を想像している人と同じような脳状態になったときに、スーパー・メアリーは「赤の像とはこのようなものなのだ」と知るのである。

実は、ピットも似たような指摘をしている(Pitt, 2019, pp.100-101)。ピットが想定するのは、メアリーが特定の色を想像しようと試みると、何かの拍子で本当にその色が想像できてしまうというケースである。こうした場合、メアリーは色を想像する能力を持っているものの、色のクオリアに関する知を持っているとは言えない、とピットは考える。実際に赤を想像する能力を行使しているときにのみ、メアリーは赤が見えるとはどのようなことか知ることができるのである。ピットは、さらに、白黒の部屋から解放されたメアリーも同じだと考える。

生まれて初めて赤い色を見せられたときに、メアリーは赤を見るとはどのようなことかについて知り、赤について思い出したり、想像したりする能力を獲得する。ジャクソンの言うことは確かにここまでは正しい。しかし、こうした能力を獲得した後のメアリーでさえ、実際に赤を見たり、赤

の見えについて想像したりするときを除けば、赤のクオリアについての知識を持っているわけではないとピットは主張する。赤の現象的性質[2]についての知識を持つことと、赤の現象的性質を想像したり思い出したりする能力を持つことは、ピットによれば、別のことなのである。ピットは赤の現象的性質についての知を面識(acquaintance)による知の一種とみなしているのである。

私はモスクワについて幾つかのことを知っている。モスクワはロシアの首都であること、冬はとても寒いこと、モスクワにはクレムリンや赤の広場があること等々。私はモスクワについてこうした命題知を持っている。しかし、私はモスクワに行ったことがない。モスクワの町並みを直接見たことはないし、街のにおいを感じたこともない。私はモスクワについて面識による知を持っていない。このように、私はモスクワについて、わずかばかりの命題知は持っているものの、面識による知は全く持っていない。

同一の対象について命題知は持つものの面識による知は持っていないという事態はありふれたことである。たとえば、現代に生きる人はアリストテレスと面識はないにもかかわらず、多くの人はアリストテレスについて何らかの命題知を持っている。アリストテレスは古代ギリシアの哲学者であること、プラトンの弟子であり、アレクサンドロス大王の家庭教師を務めたこと、『ニコマコス倫理学』を著したこと等々。白黒の部屋にいるメアリーの色に対する関係は、私のモスクワに対する関係や、現代人のアリストテレスに対する関係と同じだ、というのがピットの見解である。白黒の部屋のメアリーは、色彩の物理的特性について、あらゆる命題知を持っているものの、実際に色を見たことがないので、色についての面識知は持っていない。白黒の部屋から出されて、生まれて初めて熟したトマトを見たときに、彼女は赤についての面識知を獲得することになるのである。

しかし、ここで注意しておきたいことがある。それは、メアリーが赤い物を見たときに獲得したのは赤い物についての面識知だけではないということである。ピットによれば、そのとき、メアリーは赤を見るという体験についての面識知も獲得しているのである。そして、メアリーが赤を見ることによって獲得したのが、赤を見るという体験についての面識知であるとすれば、メアリーの例は物理主義に対する反例となることはできないというのがピットの見解である。私がモスクワを訪問してモスクワについて面識による知を得たとしても、そうして得られた知が心的なものについての知になるわけではない。モスクワは決して心的な性質を持っているわけではない。同じように、メアリーが獲得した知が面識による知にすぎないとすれば、視覚体験の物理的特性に関するすべての命題知をメアリーが持っていたとしても、メアリーの新たな知が心的な対象についての知とみなされる必要はないだろう。物理主義を論駁するためには、面識の対象が非物理的であることがあきらかにされる必要があるが、視覚体験が非物理的であるということはジャクソンの議論のどこにも示されていないのである。それは当然のことである。視覚体験が非物理的であることはジャクソンの議論の結論だからである。

こうしたピットの見解については、問題点を二つ指摘することができる。色を初めて見たメアリーが獲得したのは命題知ではなく面識知であること、面識の対象は視覚体験であること、これらは、

---

2 「現象的性質」と「クオリア」を互換可能な、同じ意味を持つ語として使用することにする。

「面識仮説」と呼ばれることもある、以前から一定の支持を得ている説である[3]。しかし体験について面識によって知るとは一体どのようなことなのだろうか。

モスクワや熟したトマトは、面識によって知られるか否かにかかわらず、知識の主体とは独立に存在している。独立に存在している対象に誰かが近づいて対象を知覚すると面識による知が成立するのである。メアリーが白黒の部屋を出て熟したトマトを見たときに獲得するのもこのような面識による知である。

メアリーはトマトの物理的性質についてあらゆることを知っていたとしよう。それでも、トマトを初めて見、トマトを初めて味わったときに、メアリーはトマトについての新しい情報を得ることだろう。メアリーは「熟したトマトはこのように見えるのか、熟したトマトはこのようなにおいや味がするのか」と思うだろう。トマトの見え方や、味やにおいについての知識は、メアリーが新たに獲得したものであるにもかかわらず、トマトが持つ物理的な性質であることに変わりはない。「トマトの物理的性質についてすべてを知っていたはずのメアリーが知らなかったのだから、それらはトマトの心的性質だ、トマトには物理的性質の他にも心的な性質もあるのだ」などと主張する人は観念論者以外にはいないだろう。メアリーが面識によって知ったトマトの見えや味や香りは、トマトという物理的対象が持つ因果的力が、知識の主体としてのメアリーに対して現れたものだからである。メアリーの内に、メアリーにとっては初めてとなる知覚体験を引き起こすのは、あくまでもトマトの物理的性質なのである。

ところが、体験の面識知があるとすれば、それは知覚対象の面識知とは異なったあり方をしていなければならないはずである。熟したトマトの面識知と熟したトマトの視覚体験の面識知を同列に論じることはできないはずである。

赤さの視覚体験を面識によって知ると言われる場合、知られるべき赤さの視覚体験が面識と独立に存在するわけではない[4]。赤さの視覚体験がどこかにあって、認識主体がその体験と何らかの関係を結ぶことによって赤さの視覚体験についての面識知が成立するというわけではない。面識の主体に赤さの視覚体験が生じることが、赤さの視覚体験がいかなるものであるかを知ることなのである。ところで、物理主義によれば意識は脳状態である。したがって、物理主義者が、メアリーが新たに獲得した知を面識による知とみなすことによって知識論証に答えようとするなら、メアリーは赤のクオリアについて知ったとき、実は、自分の脳状態について面識によって知ったのだと主張することになるだろう。

しかし、熟したトマトを面識によって知る場合とは違い、自分の視覚野が特定の状態にあることが原因となって赤の見えについての面識知が生じるというわけではない。両者の間に因果関係を認めることは物理主義者にはできないからである。因果関係があるならば、視覚野の状態に加えて、それを認識する認識主体の存在を認めなければならないことになってしまうだろう。こうして、結局、脳と心の二元論に行き着いてしまうだろう。

熟したトマトが目の前にあることによって熟したトマトの面識知が与えられるのに対して、物理

---

[3] 面識仮説の代表として、たとえばConee(1994)を上げることができる。

[4] 他人の体験や自分の架空の体験について想像する場合はこの限りではない。詳しくは次節を参照されたい。

主義が正しければ、視覚野が特定の状態にあることが、視覚野が特定の状態にあることを面識によって知ることなのである。また、それが赤さの視覚体験がいかなるものであるのかを面識によって知ることであるということになるだろう。

しかし、白黒の部屋から解放されたメアリーが獲得したのは命題知ではなく面識知であるという説が正しいとしても、面識仮説は物理主義の擁護としてはうまく行っていないように思われる。これでは問題を別の場所に移し替えただけであるように思われるからである。面識仮説の物理主義バージョンによれば、脳状態については二つのタイプの面識の仕方があるということになる。一つは、トマトやモスクワを面識によって知るときのように、脳を見たり、脳に触れたりといった仕方で、脳を知覚的に認識するやり方、そして、もう一つが、脳が自分自身を面識するやり方である。熟したトマトが見えるとき、脳が自分自身を面識しているのである。しかし、こうした説を聞かされれば、なぜ知覚的に面識された脳と自己自身によって面識された脳が似ても似つかない姿をしているのだろうか、といった昔ながらの素朴な疑問が頭をもたげてくるだろう。「頭蓋骨の中にあるぐにゃぐにゃした灰色の物質が豊かな精神生活の基礎となりうるとはいかに驚くべきことだろうか(McGinn, 1999, p.8)」というわけである。

メアリーが獲得した物理的情報とメアリーの視覚体験の間にある越えがたい断絶が、脳に対する二つの面識の間の断絶として姿を変えたのである。この断絶を埋めるのは物理主義者に課せられた課題であるという事態は変わらぬままである。

ピットの説に対するもう一つの疑問は、ピットに従えば、メアリーだけではなく、普通の環境で生きている私たちも、赤を見たり赤について想像したりしていないときには、赤を見るとはどのようなことかについての知識、つまり、赤の視覚体験のクオリアや赤の現象的性質と呼ばれるものについての知識を持っていないことになってしまうのではないかという点である。

メアリーが赤を見たとき、メアリーは赤の見えについて面識による知を得るのであるが、赤を見る体験をした後も、赤について想像したり、思い出したりしていない場合は、メアリーは赤の現象的性質に関する知を持ってはいないとピットは言う。赤を面識することができるのは、赤を見たり、赤を想像したりするときだけだからである。赤を見た後のメアリーは、赤を再認したり、赤を想像したりする能力を持ち続けるものの、赤を見るとはどのようなことか、赤はどのように見えるかといった赤の現象的性質、いわゆる赤のクオリアについての知を持ち続けているわけではないというのである。

しかし、それならば、私も熟したトマトがどのように見えるか知らないことになってしまうのではないだろうか。白黒の部屋を出た後のメアリーと私の違いと言えば、私が最初に赤い色を見たのはいつのことだったのか全く覚えていないということぐらいである。しかし、私は赤がどう見えるか自分は知っていると信じている。私は四六時中赤を思い浮かべているわけではないが、赤を思い浮かべよと言われればいつでも思い浮かべられるし、赤いトマトを描くこともできる。もちろん、赤と黒を区別もできる。こうした能力を私は持っている。こうした能力を自分が持っていることを私は知っている。それだけではない。さらに、私は赤がどう見えるか知っていると信じてもいるのである。赤がどう見えるか知っていると信じているからこそ、私はいつでも赤い色を思い浮かべる

ことができ、赤いトマトを描くことができると信じているのである。

同じ事は命題知についても言える。私は子供の頃住んでいた場所の住所を知っている。住所を思い出せと言われればいつでも思い出すことができるだけではない。思い出すまでもなく私は住所を知っていると信じているのである。そして、知っていることは思い出すことができることに還元されるのではなく、知っているからこそ思い出すことができるのだと感じている。ところが、学生時代の住所となると怪しくなる。知っているかどうかも確信が持てないし、思い出すことができるかどうかも確信がない。思い出すことができたとき、初めて自分がそれを知っていたことを知るのである。しかし、このことから、知っていることは実は思い出すことができることなのだということが帰結するわけではない。確かに私が学生時代の住所を知っていることを知るのは、学生時代の住所を思い出すことができたときである。しかし、私が学生時代の住所を思い出すことができたとすれば、それは私が学生時代の住所を知っていたからである。前者は認識の順序であり、後者はいわば存在の関係である。何もないところから想起が生じることはない。知識を持っているからこそ知識を思い出すことができるのである。また、知っていると思うからこそ、思い出そうと意図することができるのである。こうしたことをスーパー・メアリーの場合と比べてみよう。

スーパー・メアリーは意図的に自分の脳状態を変えることができるのだった。彼女は赤を見た経験がなくとも、赤を想像するときの脳状態についての知識を獲得すれば、自らの脳をそうした状態に変化させることを通じて赤を想像することができるのである。スーパー・メアリーは赤を見た後も、赤の像を生み出すには自らの脳状態を変化させようと意図しなければならないとしよう。彼女は赤を想像しようと直接意図することはできないのである。

ピットの説が妥当するのは、白黒の部屋から解放されたメアリーに対してではなく、スーパー・メアリーに対してであるように思われる。スーパー・メアリーは、赤を見た後も、赤を想像するときの脳状態とその実現の仕方を知っているだけである。そして、赤を思い出そうと思っても、自分の脳状態を変化させようとすることしかできない。スーパー・メアリーは、祖父の顔を思い出すためには必ず祖母の顔を思い出さなければならないような人と似ているかもしれない。彼は、祖父の顔を思い出そうと意図することはできないが、祖母の顔を思い出そうと意図すると、祖母の顔とともに祖父の顔も浮かんでくるのである。あるいは、ベートーヴェンの『交響曲第 5 番』の冒頭を思い浮かべるためには、『交響曲第 3 番』の冒頭を思い浮かべようと意図しなければならないような人と似ているかも知れない。『交響曲第 3 番』の冒頭が浮かぶと、それにつられるようにして『第 5 番』の冒頭が浮かんでくるのである。こうした人がいるとすれば、彼らは、祖父の顔がどのように見え、『第 5 交響曲』の冒頭がどのように聞こえてくるか知っていると言えるだろうか。祖父の視覚像や『第 5 交響曲』の冒頭部分の聴覚像についての面識による知を保持していると言えるだろうか。「彼らはそれらについて知らない」と答えるのが普通の感覚だろう。彼らにはそれらに直接手が届かないからである。

スーパー・メアリーも、赤を見たり赤を想像したりしているとき以外は、赤がどのように見えるのかという赤のクオリアについての面識知を保持していないことは明らかである。彼女が保持しているのは赤がどのように見えるかということを知る能力だけである。

一方、私たちも赤を見たり赤を想像したりしているときを除けば、赤の像が心のどこかに浮かんだりしているわけではない。私たちの内に赤との面識が常に生じているわけではない。しかし、スーパー・メアリーと違って、私たちは、一度赤を見てしまえば、後は自在に赤の像を操ることができる。白地に赤い 5 角形を何の助けも借りずに直接思い浮かべることもできるし、それを赤地に白い 5 角形の像にすげ替えることもできる。スーパー・メアリーと違って、私たちは赤の視覚像を心的な基礎行為の対象とすることができるのである。赤との面識が生じるのは、実際に赤を見、赤を見た体験を思い出し、赤の見えを想像するときだけであるとしても、私たちは一度獲得した赤体験についての面識による知をずっと保持し続けることができるのである。

Ⅱ　面識の主体と面識の対象

面識仮説は、知識論証に対する物理主義者の反論としては成功しているようには思えないものの、クオリアについての知の特異なありようについて浮き彫りにしてくれる。そして、そこから知識論証に対する新たな反論の可能性が見えてくるかもしれない。

私には知らないことがたくさんある。相対性理論については生半可な知識しかないし、モスクワについては直接見聞きしたことはない。アリストテレスとなると、その思想は中途半端にしか知らないし、風貌や声は全く知らない。私に向学心があれば、相対性理論の解説書を買って読んでみるだろうし、アリストテレスの著作集を読み漁るだろう。好奇心があれば、モスクワに行って見聞を広めようとするだろう。ただし、アリストテレスの風貌や声となるとお手上げでどうしようもない。それらを面識によって知ろうとしても、アリストテレスはもういないからである。

相対性理論やアリストテレスの思想ならば、知るとは理解することである。そして、私はそれを理解しようとして本を手にするだろう。モスクワやアリストテレスについて面識によって知るとは、実際にモスクワを見、モスクワの雑踏の音を聞き、街のにおいを感じることであり、今ではかなわぬことであるが、アリストテレスと会い、握手をし、話を聞くことである。

一方、他人の視覚体験を面識によって知る場合はどうすれば良いだろうか。友人が松島に日の出を見に行ったとしよう。友人に松島の日の出がどのように見えているか知るにはどうすれば良いだろうか。もちろん、私には他人の視覚体験を直接面識によって知ることはできない。私にできることは、松島の日の出の風景を想像して「これと同じような風景を彼は見ているのだ」と思ってみることである。私は自分の状態を友人の体験になるべく近づけようとするのである。そして、確かめようのないことではあるが、友人の体験と自分の状態が十分に似ていれば、私は友人の視覚体験のクオリアについて知ったことになるのである。自分の状態ついても同じである。来月の松島旅行で見る予定の日の出はどのようなものだろうと想像するとき、私は松島の日の出を想像し、「来月はこのような体験をするのだ」と思うのである。そして、そのときの想像が現実の視覚体験と十分に類似していれば、私は松島の日の出体験はどのようなものか、想像することに成功したのである。

このように、他人の体験のクオリアや、未来における自分、あるいは、架空の状況における自分の体験のクオリアについて面識によって知るためには、自分の心的状態を知の対象の心的状態に似

せる必要がある。これは、ネーゲルが「共感的想像力」と呼ぶものである。ネーゲルは心身問題についての古典的論文「コウモリであるとはどのようなことか」の注において、想像力は共感的に働く場合があると指摘している。ネーゲルによれば、共感的に想像するとは、共感される事象そのものに似た意識状態に身を置くことであり、共感的想像力は自己や他者の心的事象を想像する場合に使用されるのである(Nagel, 1979, p.176)。

白黒の部屋のメアリーに欠けているのは色彩体験についてのこうした共感的想像力なのである。メアリーは、色を見るとはどのようなことなのか、どのようにしても共感的に想像できないのである。色を見ている人の意識状態や、自分が部屋から解放されたときの意識状態を想像してみることができないのである。

何かを知るためには知る対象に自分の意識状態を似せなければならないなどということは、体験のクオリアについての面識知以外では考えられないことである。相対性理論について知るために自らを相対性理論に似せるなど意味不明であるし、相対性理論を理解するためには自らの脳状態をアインシュタインの脳状態に似せなければならないということもない。熟したトマトがどのようなものか知るために、自ら熟したトマトにならなければならないわけでもない。熟したトマトを見たり、食べたり、分解してみたりすれば良いのである。

また、他人の心的状態についても、体験のクオリアについて面識によって知るというのでなければ、それを知るために他人と同じ心的状態になる必要があるわけではない。たとえば、彼女は何を考えているのだろう、と怪しむことはよくあることである。彼女の考えを知るために、私は自分の意識状態を彼女の意識状態に似せなければならないわけではない。私は彼女の思考内容を知りさえすれば良いのである。たとえば、私は彼女に「何を考えているの」と聞いてみるだろう。それで答えが与えられれば十分である。彼女の思考内容を知るために、思考内容についての信念を彼女と共有する必要はない。私は彼女の考えを否定するかもしれないのである。また、彼女が怒っていることを知るのに、彼女と同じ怒りの状態に自分も身を任せなければならないわけでもない。

知覚体験についても同じである。彼女が何を見ているか知りたければ、彼女がどのような環境にいるか知れば良い。彼女の目の前に熟したトマトがあれば、彼女には熟したトマトが見えているのである。しかし、熟したトマトが彼女にどのように見えているかということになると話は別である。熟したトマトを見ている人がどのような意識状態にあるのか知るためには、当人と同じような意識状態になる必要がある。手近に熟したトマトがあれば、そのトマトを見ることによって、また、手近に熟したトマトがなければ、熟したトマトを視覚的に想像することによってその目的は達成されるだろう。

それでは、なぜ、白黒の部屋のメアリーには色彩の視覚体験についての共感的想像力が欠けているのだろうか。そして、メアリーにおける共感的想像力の欠如が物理主義の破綻を示しているということになるのだろうか。

意識状態が脳状態に付随するものだとすれば[5]、白黒の部屋のメアリーに色彩体験の共感的想像力

---

5 心的状態は脳状態に付随すると仮定することは論点先取ではない。二元論者も心的状態と脳状態の付随関係を認めることができる。

が欠けているとは、彼女の脳は、熟したトマトを見たり、熟したトマトを想像したりする人の脳状態に類似した状態となることができないということを意味することになるだろう。そして、このことは、白黒の部屋から出たことがないメアリーの脳の物理的制約によるものであり、物理主義が成り立つか否かという問題とは関係がないことであるように思われる。メアリーが色を見ることがどのようなことか知ることができないのは、色彩の体験には色彩の科学では捉えることができない心的な何かがあるからだ、というわけではないように思われる。

ここで、白黒の部屋のメアリーが視覚体験のクオリアを知ることができないという事実を、色彩の視覚体験や色彩の想像を実現する脳状態が、白黒の部屋のメアリーにおいては物理法則的に実現不可能であるということによって説明するのは的外れであると批判されるかもしれない。

たとえば、円積問題が解決不能であるのは、円積問題を解決するような脳状態に人間の脳が変容することは不可能だからだ、と答えたとすれば、これはあきらかに的外れな答えである。円積問題が解決不能であることは数学的事実なのであり、人間の脳の構造とは関係のないことである。円積問題を解決する脳状態などナンセンスな想定である。また、生命現象は分子レベルのミクロな状態には還元できないと主張する生気論者に向かって、「あなたの脳が何らかの制約を受けているのだ、だから、生命現象の還元可能性が見えなくなってしまっているのだ」と言ったとしても、やはり生気論を論駁したことにはならない。仮に、現代において生気論を信じる人たちには何らかの知的な偏向や先入観があるとしても、そして、それがその人たちの脳状態に由来するとしても、それを指摘することは生気論の誤りを指摘することとは異なることである。生気論を論駁するためには、生命現象がミクロレベルの現象によって余すところなく説明されるということを示さなければならないだろう。同じように、知識論証を批判したければ、メアリーの特殊な脳状態に訴えるのではなく、色彩の科学がいかにして色彩体験についての知を可能にするか、その道筋を示すのが物理主義者のあるべき姿というものではないだろうか。

もちろん、ある意味ではその通りである。メアリーの脳が物理的制約の下におかれているということが事実だとしても、そのことが物理主義を擁護するための論拠となることはない。しかし、この事実は、物理主義の論拠とはならないものの、知識論証に対する反証とはなり得るものである。生気論の信奉者と白黒の部屋のメアリーの間には大きな違いがあるということを忘れないでおこう。それは、前者に欠けているのが現代の生命理論についての知識であるのに対して、色を見たことのないメアリーに欠けているのは色彩体験についての共感的想像力であるという点である。そして、色を見たことがない人間におけるこうした想像力の欠如が人間の身体構造に由来するものならば、白黒の部屋のメアリーは、色を見るとはどのようなことなのか、いかにしても知ることはできないということになるだろう。色彩の科学を伝授することによってメアリーに面識知を植え付けるなど始めからできない相談なのである。

白黒の部屋のメアリーに共感的想像力が欠けているとしても、それは、ジャクソンが主張するように、メアリーが白黒の部屋で獲得した色彩体験についての知識には何か欠けたところがある、ということを意味するわけではない。それはまた、仮に、メアリーが白黒の部屋の中で色彩体験の共感的想像力を獲得したとしても、そのことによって二元論が論駁されることになるわけではないと

いうことでもある。その場合には、メアリーの身体は物理的な制約を免れていたということになるだけである。ここで、スーパー・メアリーについて思い出してみても良いだろう。スーパー・メアリーが実在したとしても、それが、二元論に対する反例となるわけではない。同様に、何らかの仕方で白黒の部屋のメアリーが色彩の視覚体験に関する共感的想像力を持つことができたとしても、色彩の視覚体験が脳状態に還元可能であることが示されたことになるというわけではないのである。

白黒の部屋のメアリーが、色を見るとはどのようなことか知ることができたとしても物理主義の正しさが証明されるわけではないし、できなかったとしても心身二元論の正しさが証明されるわけではない。結局のところ、白黒の部屋のメアリーが、色を見るとはどのようなことか知ることができるか否かという問いは、物理主義と心身二元論、どちらが正しいかというという問いとは無関係であると言うべきなのである。

これまでのところをまとめておこう。

白黒の部屋のメアリーが色を見るとはどのようなことか知ることができないのは、メアリーに共感的想像力が欠けているためであり、それはメアリーの脳の物理的制約に由来する。

白黒の部屋のメアリーに、共感的想像力による以外に、色を見るとはどのようなことか知る術がないのは、クオリアについての知の特殊な性格による。他者の知覚体験のクオリアについて知るには、自らの意識を対象に似せる以外の方法はない。

心身問題にとって重要なのは、クオリアという脳と似ても似つかないものがいかにして後者によって実現されるかという問題であって、前者の知識が後者の知識からいかにして導き出せるかという問題ではない。

ところで、知識論証とよく似た議論に「想定可能性論証」と呼ばれるものがある。最後に知識論証と想定可能性論証の関連について見ておこう。

起源をデカルトにまで遡ることができる想定可能性論証は、知識論証よりもさらにシンプルである[6]。それは、脳状態が意識を伴わないこと、また、意識が脳状態を伴わないことは想定可能(conceivable)である、ゆえに脳状態と意識は別個の存在だ、というものである。想定可能性論証は、別個に存在すると想定することが可能な事象は別個に存在することが可能であるという原理を心身問題に適用したものであるが、この原理が成り立つと考えられているのは、同一性は必然的でなければならないと考えられているからである。心的状態と脳状態が同一であるならば、それはたまたまのことではなく、必然的にそうでなければならないのである。たとえば、聴覚体験が生じているにもかかわらず聴覚野のニューロン発火が生じていないという事態が想定可能だとしよう。すると、聴覚体験と聴覚野のニューロン発火が、現実世界では常にともに生じているものだとしても、それらがともに生じていないという事態は、少なくとも論理的には可能であるように思われることだろう。現実世界でそれらがともに生じていることは偶然であると思われてくるだろう。しかし、二つの事態が同一ならば必然的にそうなのだとすれば、こうした場合、聴覚体験は聴覚野のニューロン

6 想定可能性論証を現代によみがえらせたのはクリプキ(Kripke, 1980)である。

発火とは別の出来事であるということになる。両者は同一性の関係ではなく、因果関係にあるか、または、同じ出来事を共通の原因として持つ異なった二つの出来事であるとみなされることになるだろう。

知識論証も想定可能性論証も、ともに、心的状態と脳状態の間に認識的なギャップがあるという事実に依拠している。そして、知識論証は世界についての物理的知識によってはこのギャップを埋めることはできないことを、想定可能性論証はこのギャップが、二つが別個に存在可能であることの想定可能性を裏付けていることを、それぞれ主張している。さらに、両方の議論において想像力が主要な役割を演じているように思われる。知識論証においてはクオリアの想像不可能性が、想定可能性論証においては脳状態と意識状態が独立していることの想像可能性が二元論の論拠となっているように思われる。ということは、想定可能性論証に対しても、議論における想像力の誤使用、あるいは、想像力についての誤解を指摘することによって反論する可能性が、物理主義者には残されているということになるのではないだろうか。

実際、ネーゲルは想定可能性論証について、知覚体験を想像するときに使われる想像力と脳状態を想像するときに使われる想像力の種類が異なるという事実を考慮に入れれば、物理主義者にも応答の可能性が開けてくるかもしれないと示唆している(ibid.)。

ネーゲルによれば、想像力には共感的想像力の他に、知覚的想像力とでも呼ばれるべきものがあるという。知覚的に想像するとは、もし自分がある対象を知覚するならば自分はどのような意識状態にあるかを考え、それに似た状態に身を置くことである。そして、知覚体験を想像する際に使用されるのが共感的想像力であるのに対して、脳状態を想像する際に使用されるのは知覚的想像力の方なのである。たとえば、松島の日の出の場合、松島の日の出を見るとはどのようなことだろうかと友人や未来の自分の視覚体験について想像する際には共感的想像力が、それに対応する脳の視覚野の状態について想像する際には知覚的想像力がそれぞれ使用されている。松島の日の出の視覚体験とそのときの視覚野の状態が同一だとしても、使用される想像力の種類が異なれば、それが異なった姿で姿を現すのは当然のことであるというわけである。

ネーゲルの説は、同一の対象を異なった知覚器官によって知覚する場合と類比することができると思われるかもしれない。白くなめらかな壁を見、触るとき、視覚に現れる壁と触覚に現れる壁は全く似ていない。視覚に現れる壁は固くはないし、触覚に現れる壁は白くない。それにもかかわらず、見られている壁と触れられている壁は同じ壁である。同じ壁が異なった現れ方をするのは、異なった知覚器官を通して壁を知覚しているからである。同じように、同じ対象でも異なった想像力を使えば、異なった仕方で姿を現すのではないだろうか。

しかし、この類比はうまく行かない。知覚体験には対象とその現れの区別が存在しないということはすでに指摘されていることである。痛みは感じられるとおりのあり方をしているし、聴覚体験は感じられるとおりに存在している。痛みや音体験は、実は、感じられる通りのあり方をしているわけではないという主張が何を意味しているのか明らかではない。また、仮に、知覚体験にも現れと体験そのものの区別があるとしても、今度は、体験の現れと脳状態がどのような関係にあるのかという問題が生じてくるだろう。それでは元の木阿弥である。

さらに、そもそも、共感的想像力と知覚的想像力は、多くの場合、想像の内容に違いがあるわけではない。有名なピアニスト、たとえば、アルゲリッチのピアノの演奏を聴いているところを想像する場合を考えてみよう。私は、知覚対象としてのアルゲリッチのピアノの音を想像することもできるし、アルゲリッチの演奏を聴くとはどのようなことかという知覚体験の質感を想像してみることもできる。ネーゲルの分類に従えば、前者は知覚的に想像することであり、後者は共感的に想像することであるということになるだろう。しかし、両者において私が行っていることは同じである。聞こえてくるだろうピアノの音を想像しながら、前者の場合は「アルゲリッチのピアノの音はこのようなものなのだろう」と思い、後者においては、「アルゲリッチのピアノを聴くとはこのようなことなのだろう」と思うのである。

聴覚野の状態を想像する場合も同じである。将来、何らかの方法で自分の聴覚野の状態を直接観察できるようになった場面を想像してみよう。私はそのとき目にするだろう聴覚野の姿を想像することもできるし、聴覚野を視覚的に観察するとはどのようなことか想像することもできる。こうした二つの想像において内容に違いがあるわけではない。知覚的想像と共感的想像には、聴覚野の視覚像を思い浮かべた後で、それを視覚対象の想像とみなすか、または視覚体験の想像とみなすかという違いがあるだけである。

さらに、想定可能性論証が想定するあらゆる場面において共感的想像力が関わってくるというわけでもない。たとえば、私はCDでピアノ曲を聴きながらキーボードを叩いているところであるが、今のこの聴覚体験が聴覚野のあり方とはいかなる関係もないと思ってみることは容易なことである。むしろ、聴覚体験と聴覚野が何らかの関係にあると想像する方がはるかに難しい。私の知覚のどこにも脳が姿を現していないのだからそれは当然のことである。また、誰かの脳の画像を見ながら、これには意識は伴っていないと考えてみることもたやすいことである。脳に伴う意識などどこにも見つからないからである。こうした想定において、二つの異なった種類の想像力が行使されているわけではない。特に前者のような場合は想像力さえあからさまな形では関わっていない。ネーゲルのように、脳状態と意識状態の関係が必然的であるようには思えないという事実を、想像力の区別によって説明しようとすることには無理があるように思われる。

知識論証と違い、想定可能論証において、想像力は実際のところは本質的な役割を担っていないのだとすれば、心的状態と脳状態が別個に存在することができるという考えを想像力の誤用に由来するものとして説明することはできないだろう。知識論証については、そこにおいて使用される想像力の特異なあり方を指摘することによって反論することができるとしても、知識論証によく似ているように見える想定可能性論証は無傷のまま残っている。

それでは、想定可能性論証は成功しているのだろうか。それは次なる検討課題である。

文献表

Coleman, S., (ed.) (2019), *The Knowledge Argument*, Cambridge University Press.

Conee, E., (1994), “Phenomenal Knowledge”, reprinted in Ludlow, P., *et al.*, (eds.) (2004).

Jackson, F., (1982), “Epiphenomenal Qualia?”, reprinted in Ludlow, P., *et al.*, (eds.) (2004).

Jackson, F., (1986), “What Mary Didn’t Know”, reprinted in Ludlow, P., *et al.*, (eds.) (2004).

Kripke, S., (1980), *Naming and Necessity*, Harvard University Press. （『名指しと必然性』八木沢、野家訳、産業図書）

Ludlow, P., *et al.*, (eds.), (2004), *There’s Something About Mary*, The MIT Press.

McGinn, C., (1999), *The Mysterious Flame*, Basic Books.

Nagel, T., (1974), “What Is It Like to Be a Bat”, in *Mortal Questions* (1979), Cambridge University Press.（『コウモリであるとはどのようなことか』永井訳、勁草書房）

Pitt, D., (2019), “Acquaintance and Phenomenal Concepts”, in Coleman, S., (ed.) (2019).

星野　徹(2007)、「経験することと知ること」『埼玉大学紀要　教養学部』第 43 巻第 1 号